

Title	開物思想の啓蒙性について：佐藤信淵の「家学」を中心に
Sub Title	On the Enlightenment in the "Kaibutsu" Ideas : Case of the "Kagaku" of Nobuhiro Sato
Author	戸沢, 行夫(Tozawa, Yukio)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1972
Jtitle	哲學 No.59 (1972. 8) ,p.77- 104
JaLC DOI	
Abstract	I think that enlightenment is an idea of a transition period from Feudalism to Modern. It may be the idea as a presupposition of Modern. When I give an instance in Japan, it is the "Kaibutsu" ideas. In this essay, I show the "Kaibutsu" of Nobuhiro Sato in the age of Edo, which is relative to economics. He was a political economist, politician, scientist, strategist and a Shintoist (Kokugakusha), in a sense, a Japanese encyclopedist in this age. Its ideas make much of observation and recognition of Nature, so that become to be very scientific and reasonable. But on the other hand, it is relative to "Shintoism" and the consciousness of Japanese household, in its fundamental principle. Then, its enlightenment do not develop to make progress to Modern Ideas. So in this essay, I intend to show its enlightenment and its limit of "Kaibutsu" ideas, as compared with Modern Ideas.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000059-0077">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000059-0077</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 開物思想の啓蒙性について

——佐藤信淵の「家学」を中心に——

戸 沢 行 夫

## (1)

我国の近代化の過程を考えていく場合、それを経済に主軸をおいて、資本主義化として捉えるにしても、政治や法律制度あるいは都市と農村の間における様々な場面での相互コミュニケーションを基軸に据えてその過程を明らかにすることもまた可能である。それを思想の場面で考えた場合、近代思想そのものではなく、むしろそれを準備する、あるいはその形成途上の思想としての啓蒙思想に注目することも我国の近代化を捉えるひとつの方法といえよう。

ヨーロッパにおける啓蒙思想の登場は、すでに17世紀中頃にイギリス・オランダに見られ、以後フランス大革命を迎えるまでさまざまな様相をもって見られた。しかし、そこに共通に見出せることは、中世的な蒙昧＝因襲的偏見を脱出して、来たるべき近代社会への一条の光としての「理性」の発見に到達していることである。

その理性は、それまでの社会をあらゆるところで支配してきた教会の宗教的權威を批判することから始まり、そこに自然主義に基づいた科学的合理主義を前面におしだそうとする主張でもあった。そして、合理的認識に基づいた理性は、実践的なものとして、旧来とは全く様相を異にした形で「社会と個人」の問題を新たに提出し、その自主的な組織化へと向うことになる。<sup>(1)</sup> その具体的な顕われは、政治や法律等々の制度に見られるが、それが教育の場面に最も典型的な形で見られるところに啓蒙思想の大きな意

味があろう。

中世的な宗教的蒙昧と絶対君主制の圧迫から脱出した啓蒙的な理性は、たとえ近代社会の成立をその本質において根拠づける原理として、まだ不足するものであったとしても、それは「人間が自分で招いた未成年状態な脱却する」(カント『啓蒙とは何か』)ための悟性であり、形成期ブルジョアジーにとって一条の光であったことは明らかであろう。

啓蒙思想は暗黒の蒙昧からの脱出を企てるなかで、近代社会に特徴的に見られる「社会と個人」を問題にし、そのひとつの可能的帰結として人間生活の「進歩」を見ていた。

しかし、このような啓蒙思想も、それ自体がもつ強度の主知主義的傾向を脱出するまでには至らなかった。未成年状態からの脱出は、自らの悟性を意識化し、合理的認識の根拠となりえた一方で、知性を絶対視する方向をとった。そのことは逆に知性を通俗化することになり、また知性を自負的に理性に結びつけようともさせた。そこに「社会と個人」に関連した啓蒙と広い意味での教育の問題が、必然的に来たるべき近代社会との連続面で提出されてくるのである。

さて、我国の啓蒙思想として今日一般によく知られているのは、明治維新後およそ十年頃までの時期に見られた明治啓蒙期であろう。特に当時米国の弁務使の任から帰った森有礼の提唱のもとに、福沢諭吉、西周、津田真道、西村茂樹等々の「都下の名家」が結集して成立した明六社は、二年足らずの活動ではあったが、この時期を代表する啓蒙的集団として、あらゆる学問分野にわたって、その活躍はめざましいものであった。それは集団としての機能において、またとり上げられた諸論説においても「邦人ノ為ニ智識ヲ開ク一助ト為ス」(明六雑誌)ことを意図していた。即ち、発足当時の明六社制規の社を設立する主旨には「我国ノ教育ヲ進メンカ為ニ」とハッキリと人民の教育が強く自負的にさえ意識されていたのである。<sup>(2)</sup>し

かし、明六社の人々が「十ニ八九ハ政府ノ関セザル者ナシ」(福沢)というように、福沢を除いてその多くは明治絶対主義政府の優れた官僚としての地位にあった。そのことは必然的に彼らの洋学者流の新知識と海外留学での豊かな実体験とが、明治政府の富国強兵策を理論的に代弁することになり、と同時にそれを補強することをも意味した。上からの近代化を急速に推進する明治政府にとっては、近代ヨーロッパの新鮮な合理主義を実体験し、その知識を身につけている洋学者を必要とした。逆に下級武士層からの出身が多い洋学者にとって、維新の解放のなかでその才覚を生かす最短距離は官途を選ぶことであった。明六社が「学問上ノ社ナリ、政治ヲ談ズルモノニ非ズ」とするのは、啓蒙的な洋学者の多くがすでに明治政府と密接に結びついている現実を目撃した福沢の発言であった<sup>(8)</sup>。即ち、明六社は現実には最も政治的でありながら、ただ学術文芸の社としてのみ活動しようとしたところに矛盾を内包させていたのである。

それ故に、この時期の華々しい啓蒙活動も次の十年代に主として農村を中心にして開花する自由民権運動に対して思想的に少なからずの影響を与えたとしても、本質においては人民に向うことなく、絶対主義に結びつく「都下の名家」の啓蒙活動に止まり、それとは全く異質なものであった。

ヨーロッパの啓蒙思想も初期にあってはなお絶対君主制によって制限されていたが、その成長は近代思想としてフランス大革命を初めとする市民革命を準備するまでに至っている。我国の明治啓蒙期に移入された思想は、J. ロックや J. S. ミルであり、明らかにヨーロッパの近代思想であったが、それは結果的に絶対主義を理論的に代弁するものになったのである。

しかし、この時期の啓蒙思想が洋学者たちに依って移入されたヨーロッパの近代思想に基づいていたのに対して、我国にはそれなりに独自の自生的な啓蒙思想がすでに「開物」の思想として成長してきていたことを看過してはならない。それは時期的に江戸中期、八代将軍吉宗による一連の改革のなかで見られた洋学＝蘭学奨励の頃から寛政・天保の改革を経て幕末

に至るまでの時期であり、社会的には商品経済の漸次的な発展が見られ、諸外国が頻繁に沿海に渡来してきた時期でもあり、幕府及び諸藩はそれぞれ内憂外患に苦慮していた時期にあたる。

開物の思想はこのような状況下に成長してきた思想として必然的に啓蒙性をもち、また蘭学の影響もあったとはいえ、その本質は我国に自生してきた思想としての特性をもっていた。それは明治啓蒙期の担い手であった明六社の人々が教授あるいは教授並等として関係した幕府の洋学教育機関である開成所にその名称がうけ継がれていた。それを遡れば幕末期の洋学所・洋書調所・蕃書調所そして天文方へとつながる系譜である。<sup>(4)</sup>これらの機関はそれまでの洋学＝蘭学に英学・仏学・独逸学等々を加え、その普及や書物の翻訳にあたり、その啓蒙的役割には大きなものがあつた。しかし他方、この機関の設置は洋学を幕府の管理、統制下におき、その自由な発展あるいはまた開物思想との接触を阻害することにもなった。

この開物の思想も儒教的要素を踏まえたものであることは、この期の他の思想と同様であつたが、そこには我国に独自の啓蒙性の展開が見られ、多分にいわゆる形成期ブルジョアジーの思想としての性格を備えていたと思われる。しかし、それは封建的な蒙昧からの脱出を企てながら結局は明治啓蒙期まで発展することなく、ただ内憂外患に苦悩する封建支配層に対して、その未成年状態を指摘したに止まり、また自らもそこに結びついていった。

そこには江戸中期から幕末維新へと移行する幕藩体制そのものの封建性の弛緩があり、逆にその強制もあつたであろう、と同時に、開物思想そのものの、あるいは我国の近代思想に先立つ啓蒙思想そのものがもつ本質的な特性があるのではなからうか。

以上のような啓蒙思想への一般的な理解を踏えて、佐藤信淵が「家学」として打出した開物の思想を具体的に検討してみたい。

- (1) ヨーロッパ近代社会の成立はまた、「市民」社会の成立でもあった。それは人間が自らの「個我」を確立していった過程でもある。社会のあらゆる基礎単位としての個人の確立は「社会と個人」の関係を全く新たな様相に塗り変えたことは言うまでもない。
- (2) 発足時（明治7年）の制規は、翌年5月に改定され、そこでは「教育」のコトバが削られている。その意味及び明六社の活動については別稿に譲りたい。
- (3) 福沢自身は在野の洋学者としての意識があり、官途にある者は洋学者流として区別していた。（学問のすすめ）しかし、後に福沢も国権論の立場をとることになる。
- (4) 蕃書調所は安政元年（1854年）頃に準備されているから江戸末期である。蕃書のコトバでも明らかなように、その設立は外国の脅威の下であり、それ故に当初は国防政策と関連し、外交文書の事務処理にも参加していた。その中で洋書の翻訳・届出による統制も行なっている。なお蕃書調所設立の経緯については故原平三氏「蕃書調所の創設」（歴史学研究103号）に詳しい。

## (2)

佐藤信淵(1769年～1850年)に対する評価は、佐藤家五代二百余年間の伝統と絡んで、その膨大な著書の信疑とともにまだ不明確といわざるをえない。例えば森銑三氏は「疑問の学者」として信淵をとらえ、その著述の詳細な分析と検討をなされ、「私は佐藤家の学家などというものを全然認めない。」と結論づけておられる。このような見解に対して、森氏も批判されている鵜田恵吉氏の佐藤信淵像はその対極の立場にあり、ほぼ「近世日本の生める一大傑士」としての評価が全編に一貫している。鵜田氏の信淵評価には執筆時（昭和16年）の時代的背景が微妙に影響していたといわざるをえない。しかし、森氏の信淵への批判的な評価も、そのポイントは主として信淵が主張した佐藤家五代の「家学」というところにあった。

氏は「佐藤家の家学の内容は、時と場合とに応じて自在に伸縮するのですが、これは要するに、その家学は信淵一代に捏造するところであって、さような学問が古来から伝存していたのではない。」とされて佐藤家「家学」には全く否定的な見解をとっておられる。事実、信淵の著書に

は重複するところ、矛盾するところ、明らかに誤認と見られるもの等々も多く、「疑問の学者」といわざるをえない。

しかし、この小論は一応森銑三氏も指摘しているように、「学問にそうした伝統的な背景（家学のこと）を持たしめ、特殊性を持たしめることによって世人の信頼を得、それを以て諸侯にも取入って、大いに成するところがある」という認識から発足することにしたい。何故ならこの見解はまた鵜田氏が「歛庵翁始め四翁の著書もみな信淵が大いに校訂増補して体系を整へたものであるから、佐藤家の家伝書なるものは、事実全部信淵の著書とも見做さるべきもの」とする見解と決して矛盾するものでないからである。<sup>(1)</sup>

佐藤信淵の著書は、その数は三百部八千巻あったと伝えられ、その内特に家伝書と銘打つものが三十六部二百十五巻あったという（鵜田）。その内容はあらゆる分野にわたり、天文、農政、農学、物産、経済、兵学、教化、刑法、医学、歴史、地理等々がその主なるものである。これらは信淵に言わせれば、佐藤家五代二百余年の伝統が築きあげてきた家学であろうが、ほぼその全体は信淵によって校訂増補され集大成されたものと見て良いであろう。そして、これら百科全書的内容に共通に見られ、またそれらを基底において支えているものが開物の思想であるということが出来る。

「開物」のコトバは『易経』のなかの「開物成務」からきているという。『養生訓』や『女大学』を著わして、道德学者として知られる貝原益軒は、優れた朱子学者でもあり、その思想はただ観念に走らず経験に基づいた実学の立場にあった。益軒は『大和本草』『菜譜』などにおいて、開物成務を「物理の学は、その関係また小と為すべからざるなり、それ思うに、古昔聖人、物を開くを、務と成すの功、固より至れり、大なる哉」と読んでいる。「物を開くを務と成す」=開物成務をさらに哲学的認識において基礎づけたのは、近世後期の儒学者である皆川淇園であるという。<sup>(2)</sup>

この開物の思想が観念的なものから、実際的なものへと移行する過程に

は、信淵もおそらく接していたであろう中国の技術書『天工開物』（宋応星著）の存在を看過しえないであろう。<sup>(3)</sup>「天工」とは「人工」に対するもので、その「人工」は、まさに「物を開く」ことに他ならない。そこでは開物の思想が観念の世界から降り、物質（＝自然）に対する認識の形をとって顕われてきている。即ち、人知によって自然界のうちから人間生活に必要なものを採集し、加工し（＝産業）、そして実生活に役立たせること（＝経済）、そこに信淵の開物思想の新たな展開をみることができる。

信淵の開物思想は、彼の著書のあらゆる各所に見られ、それらの根幹をなす主張となっているが、この小論では主著『経済要略』（文政5・1822年）『経済要録』（文政10・1827年）及び『垂統秘録』（文政6年頃）を主としてとり上げる。それは信淵の開物思想が時々「経済開物」として唱えられ、経済との関連で体系化されているからでもある。<sup>(4)</sup>

信淵の息子昇庵の著わした『佐藤家譜略記』の伝えるところに依れば、家学の始祖歟の著書に『国土経緯論』2巻（不伝）なるものがあり、そこでは「我家ノ農政経済ノ学ハ此書ヲ以テ基原トスル所ナリ」とされていると云う。この著書の内容は明らかにできないが、信淵は『経済要録』の冒頭で「経済」について次のように述べている。

経済とは国土を経緯し、蒼生を済救するの義なり、所謂国土を経緯するとは、先其国の城下より東西の領分界に至る迄の度数を測量するを経と云ひ、又其南界より北界に至る迄の度数を測量するを緯と云ふ、凡此経緯を審にし、気候を察し、土性を弁じ、地方を尽すは、食物、衣類の大本なり

として経済＝国土の経緯を説き、さらに「蒼生を済救する」ことについては、

其境内の人民をして、水旱の患なく、居処安寧なるを樂ましむるを済と云ひ、各自に産業を勉励せしめて、食物・衣類の余あらしむるを救と云ふ



とある。このような信淵の経済は、まず国土の経緯を測量し、その性質を知ることから始まる。開物の業も先づこの「国土太初の素朴を熟するを要とす」るのである。そこに経済と開物の結びつきを見ることができ、信淵の経済開物の考え方が、それまでの儒学者たちの唱える観念的なものと異なり、自然物＝物質の認識から発想されていることを示している。

例えば、この頃、荻生徂徠、太宰春台らの徂徠学派における「経済」は極めて広義なものに理解されており、観念的であった。春台の『経済録』は経済を次のように規定している。

凡天下国家ヲ治ルヲ経済ト云。世ヲ経シテ民ヲ済フト云義也。……  
(中略) ……堯舜ヨリ以来、歴世ノ聖賢、心ヲ尽シ言ヲ立テ教ヲ垂玉フハ、皆経済ノ一事ノ為也。聖人ノ道ハ、天下国家ヲ治ルヨリ外ニハ別ニ所用無シ。<sup>(5)</sup>

即ち、儒学者の唱える経済は、むしろひとつの国家論であり、観念的な経世済民の学でしかなかった。その点は信淵の経済開物にも見られることではあるが、儒学者の経済は究極において聖人の道の解明に向い、つまりは孔子の教えに到達することが目標であった。しかし、信淵は経済に開物の思想を加えることによって、経世済民の学をより具体的なものにしたいえよう。信淵自身も儒学者に対しては、「博学多聞にして古代に通達したる儒士は多けれど、能く国家を富盛して万民を済救する賢者は稀なり」と批判して、自ら別の立場をとっている。

その根拠となっている開物の思想とは、

国土を経営し、物産を開発し、境内を富饒にして、人民を蕃息せしむるの業なるを以て、即ち天地の神意を奉行する事なり

とし、また別の所では次のようにいう。

開物とは境内を審かに経緯し、気候を考へ、土性を察し、山谷、池沢を開発し、平原・曠野を新墾し、種々の貨物を出して、其製造を精妙にするを云ふ。

前者は『要略』における「経済」にあたるもので、儒学者とは違った意味で、治国平天下、国家富盛を願う経世済民の学としての経済が唱えられている。そしてそれを具体的に保証するものが開物の思想であり、その基礎的な前提条件として「天地を経緯するの大道を講明」する必要があった。それは国土の性質を知り、気候の寒暖等々の自然を正確に認識することから発足する。

信淵はそこに土石、生植・活物の三種有ることを見ており、その品物の性質に因り、「自然に気候の寒熱に適と不適有り、土地の陰陽にも宜と不宜あり」とする。それ故に、物産を開発すること＝開物は、まず自然界の性質をよく認識しなければならない。信淵は経済開物を主張するとき、即ち、人間が自然を改造し（＝人工）物産を興さんとするには「天工」を熟知すべきことを再三説いたのである。信淵は次のようにも説いている。

天理を熟察せよ、夫れ大地は人類の本居にして、山嶽・平原は第一の宝蔵なり、池沢・河海は第二の宝蔵なり、人世日用の諸物は、皆な此の二蔵より出づ

「天理」、即ち自然の理＝法則性を十分に観察しようとする姿勢は、この時期にあって、明らかに一定の科学性をもった新しい認識の方向をとっており、ひとつの啓蒙的な性質を備えたものといえることができる。<sup>(6)</sup> そのことは必然的に自然を開くための技術を必要としてくるであろう。信淵の著書の多くが農業はもちろん鉱山、漁業、兵学等々の技術を取り上げていることが、それを示している。そしてその技術はまたその利用の問題として組織と関連してくる。それ故に、開物の思想は経世済民の学としての経済と結びつかざるをえない。信淵の経済開物とは、まさにそのようなところに位置づけられるものである。<sup>(7)</sup>

山沢より宝玉、七金、諸石、草木、禽獸等々を、河海より宝珠、珍貝、海藻等々を、そして平原から諸穀、諸果、麻、桑、蚕、竹木等々を獲得すること、即ち物産を開発すること（＝産業）は、この当時の財政窮乏にあ

えぐ諸藩にとっては注目すべきことであった。

信淵の経済開物は、自然の理の正しい観察から発足して、それに適した物産を興すことであるが、それが具体的に実践に移されるためには経世済民の経済学でなければならなかった。その結びつきについては次のように述べている。

能く境内の平原・曠野・山谷・河海・池沢・林藪等を経緯して、氣候の寒暖を審にし、土性の剛柔を察し、氣候に適ひ、土性に宜き所の諸品を作り、天地化育の勢力を尽して、土地に遺利なからしめ、士農工商共に其職を勤て、懈怠すること無く、奢侈すること無れば、財用充足て、国家富盛すること必せり、即ち是經濟の要旨にして、国家に主たる者の一日も怠るべからざるの急務なり、

信淵は「国家に主たる者」の急務として経済を説いている。その限りでは、経世済民を聖人の道に求めた儒学者たちの説く経済と同様にひとつの国家論を成している。しかし、経済に開物の思想が加えられたことによって、それは地上のものとなり、儒学者たちのそれとは具体性において異質なものであった。そして経済開物は更に「融通」交易の観念と結びつくことによって、一層ダイナミックスをもった経済論ということができる。土地経済を主体とする閉鎖的・自己完結的な封建体制にあって、たとえ限定されたものであったとしても、交易流通の観念を説いたことは、その封建制そのものに弛緩があったともいえようが、むしろそれは遊歴生活を送るなかで経験的にその必要性を説いた信淵の優れた啓蒙性ということができよう。

融通交易の観念は、信淵の思想において開物とともにその主軸をなす考え方で、これによって経済開物の思想は、それまでの儒教に基づいたあらゆる閉鎖的観念的な思想とは明らかに異質なものとなり、新たな方向を示唆するものであった。

その融通交易とはいかなるものであろうか。信淵は次のように説いている。

先づ財用の融通を宜しくなし、自国他邦の貨物を多く輻湊せしめ、舟車の運送を便利にし、遍く諸州の物価を校りて審かに其の輕重を考へ、多き場所の物品を買入、其の少き土地に輸りて、之を売捌き、有る処の産物をば無き処に移して、物価の昂低を轉換し、貴賤を交易して、互市の利潤を収めば、其の国次第に富実して、諸洲の貨物招かざれども、境内に聚り、漸々年数を経るに従ひ、金銀珠玉、奇質珍宝、綾羅錦繡、百穀百果の類までも皆充満するに至るべし

その国の余剰産物を相互に分配して不足を補い合うことが融通である。そして融通し合うことは、新たにそれぞれの国の生産を刺激し、そこでの産物の増産に結びつく。信淵は諸国で特産される物産が一ヶ所に停滯することなく、貧しきところを相互に補充し合うべきことを説いた。しかし、この融通＝交易の観念は決して近代的な意味での自由競争、自由交易をさすものではなく、実際にはむしろ経世済民の経済論のもとにある統制経済の色彩をもつものといえよう。それ故に、融通の観念を加えた経済開物は、ひとつの経済政策であり、また国家観・政治観にも結びついている。『要録』『要略』の「垂統編」及びその独立したものと思われる『垂統秘録』は、信淵の家学の根幹である経済開物を彼の国家論の中で位置づけ、体系化しており、同時にそれらを組織との関連で構想していたことを示している。

信淵の構想する国家機構は基本に三台（神祇台、大政台、教化台）六府（本事府、開物府、製造府、融通府、陸軍府、水軍府）を設けている。『垂統秘録』においては、六府の他に「小学校篇」として広済館・療病館・慈育館・遊児廠・教育所の設置も構想されており、子孫の教育及び産業の伝習<sup>(8)</sup>についても考慮されていたことが解る。

事天の政事を施し行ふには、凡そ万姓の営為する所なる、其事相似て近き者を類聚して、世界の諸産業を八科に分てり、即ち草・樹・砥・匠・賈・傭・舟・漁の八民是なり、斯の如く万民を八業に區別して、此を六府に分配し、一民に一業を賜はりて各其事を勉励せしめ、厳し

く他の業に手を出すことを禁ずるを法とす。

この「垂統」の冒頭に見られる文脈に明らかなように、信淵の国家観は神意に基づいた政事を基礎にしており、経済開物は「国家に主たる者」によって統制されるべきもの、あるいは少なくとも指導されるべきものと考えられている。

神意に基づいた政治観は、彼が強調する家学と融合して幕末の国学者としての信淵をその本質において規定することになるが、その点は次章で検討することにして、ここでは六府のうち開物府と融通府について見よう。

先づ、開物府とは「樹民・砦民を撫御して開物の業を講明し、種々の物産を興し、貨財を多生出せしめて、国家を豊饒にすることを司どる」ことをその役割とする<sup>(9)</sup>。そして開物府と大いに関連する融通府は、先の融通＝交易の観念をふまえて、次のように説かれている。

世界の貨物を統轄し、天下の商民を撫御して財物を融会し、多き所の諸物を少き所に運び、賤き所の物品を貴き所に移して、有無相通じ輕重相交て、南北東西の偏鄙たりと雖ども、万貨屈伸の差ひと、群品高卑の異なる無く、各土に生ずる所の物産をして、常に其価を平準ならしめ、且又遍く外商せしめ、互市交易の利潤を収めて国内を充実し、大に万姓を滋息蕃衍せしめ、以て上下をして豊樂せしむることを司どるの職也

開物府は、諸国に会所を設け、官人を配置して、樹民、砦民等の採出した産物を悉く統会してこれを融通府の下に再分配するのである。融通府は、諸府から輸す貢税を取り集め三台六府以下の国家機関、村々の官署の費用にそれらを再分配させるが、その主要な目的は「専ら交易の利潤を収めて財用を富裕ならしめ、以て国内の窮乏を周救する」ことにあった。

諸国それぞれでの自給自足を基本とする土地経済が原則となっている幕藩封建体制の下にあって融通＝交易の観念を取入れた信淵の経済開物の思想は、それ自体のうちに当時の限定された交易の停滞性を打破る発想を内

包していた。それは開物に見られる自然認識の科学性に基づいていることも大きな理由であろうが、やはりそこには飢饉や天災による物価上昇と窮乏化にあえぐ当時の社会的要請があったことは言うまでもない。それ故に、経済開物はなによりもまず諸侯のための経世済民の学でもあり、また一種の統制経済をめざすことになるのである。

長い遊歴生活を送り、諸国を歴訪している信淵は、度重なる飢饉や天災を身をもって経験しており、生産の著しい減少にともなう物資の窮乏、そして物価の昂騰にあえぐ諸国の苦況も眼のあたりに見てきている。それ故に信淵の経済開物は人民に対しては厳格な統制経済の形をとり、逆に諸侯にとっては経世済民の指導経済として提出されることになった。

夫互市交易は実に国家の大事なるを以て、其權柄<sup>けんべい</sup>をば悉く此府（融通府）において掌握し、商民等は其性の好む所の物を売買することを課し、各自に厚く餼稟<sup>てあて</sup>を賜はりて此を役使し、私に交易することを厳禁す、故に皆是融通府の<sup>しもべ</sup>臣隸たるに過ぎるもの也、然りと雖ども、能く其事に精妙にして、功を積み<sup>かさ</sup>勞を累ぬるに及では、漸次に昇進して此府の奉行にも至ることにて、其位階の等級に従ひ、<sup>てあて</sup>餼稟に多少あるは勿論なり

私的な交易を禁じ、そのすべてを融通府の下に厳しく統制しその支配下におくこと、それが国の財政窮乏を救い国家を富盛させる道でもあった。ここには諸侯の経世済民の術として経済開物を強調するがために、人民＝愚民の観念さえみられ、その統制指導の経済論は、決して今日的な意味でのそれでないことは明らかであろう。余剩物産を他国に輸出して交易を盛にすること、財用の融通自在であること、それらはある程度は国力を豊かにするであろうし、「人民漸々蕃息し、自然に万物皆境内に輻湊して国家大に富貴するに至る」であろう。しかし、そこに愚民観がある限り、信淵の経済開物の思想は、決して人民の自由な交易を促すためのものにはならず、ただ人民を支配統制する治者の経済論たらざるをえなかった。

『要録』の「富国下編」の末尾で、信淵が次のように言う時、そのことは一層明らかであろう。

有無相交易して人民に便ならしむることは、国家を領する者の最緊要なる専務にして、固より百姓町人等に任ず可きの理あることなし、元来国を富すの機密なる者は、大半交易の業に在ることなり、可不察哉、以上簡条は当世時務の最枢要なる者にして、治国平天下の大経済も他に非るなり、卿等能く此を察せよ。

以上において、佐藤信淵の経済、及びその基礎としての開物、更にそれらを支え、国家の富盛の原動力となる融通＝交易について概観してきた。それは開発すべき自然界を熟察すること、即ち、その法則性を把握すること。具体的には山相や国土の経緯そして気候の寒暖を知ることから始まる。そこに初めて物産の開発＝産業が興るのであり、またその必然的な結果として自然を改造するための技術も注目されてくるのである。信淵の経済開物において自然界の認識がどの程度科学的に正確であったかは一応別にして、開発の対象となる自然界を観察しようとする志向は、自然と精神（人間）の意識的な分離であり、その対象化に他ならない。そして対象である自然を観察し、その理を知ろうとするところには、まさにその法則性を追求しようとする人間理性の働きがあった。主として自然に包摂されたままの人間と社会が思惟されていた時代にあって、自然を客体化する思惟様式は、明らかに「物を開く」＝開物の思想として、優れて啓蒙性に富んだものということが出来よう。そのことは聖人の道として経済を把えた儒学者とは、たとえ経世済民の学ということで類似するものがあったとしても、決してその様に観念的なものにはならずむしろそれを地上におろし、自然＝物質を基礎とする経済開物を説くことにもなったのである。それは又、やはり融通＝交易の観念についてもいえることである。たとえ限界があるにしても、自給自足を基本として、自己完結的である封建的秩序にあって、その停滞性を脱却して物資の交易を推進しようとする姿勢は、停滞性のなかで

富盛を模索する治者には在りえない発想であり、明らかに土地経済から商品経済への漸次的な移行過程に見られる発想に他ならず、それはまた幕藩体制の弛緩、そして崩壊への道程でもあった。

この様な信淵の経済開物の思想を近代思想への橋渡しの役割を担う啓蒙思想として考えた場合、不十分ながらも、その要件をそれ自体のうちに備えていたことは明らかであろう。しかし実際にはこの経済開物の優れた啓蒙性も、我国の近代を担う思想として、その橋渡しの役割さえ十分に果たせず、またその方向に発展しえなかった。漸次的に進行する農民の商業化、それは自給自足的な土地経済の封鎖性を破るものであり、またいわゆるブルジョア形成期の志向でさえあったといえようそして飢饉や天災による絶対的な窮乏化現象はそれを更に必然化させたのである。信淵の経済開物もそのような混沌の時代の所産であった。

しかし、そのような時代の推移にこの経済開物は同伴しえず、またその志向性を発展させえなかったところには、外患内憂に苦慮する幕末の社会的状況があったであろうし、と同時に実は信淵の経済開物そのもののの中にも、そのような封建的状況を逆に支え、また助長するような要因があったと言わざるを得ないであろう。それは経済開物の優れた啓蒙性が究極において、我国の近代思想として開花しえなかったことを意味する。次に、信淵の経済開物の思想が、先述のように中世的・封建的な蒙昧を脱出すべく優れて啓蒙性を思想自体のうちにもちながら、なおそこから近代思想へ飛躍しえなかった、いわばその限界性について簡単な検討を加えておきたい。それは信淵が自らの学問を佐藤家五代二百余年の『家学』である、としてそれを殊更に強調する作為と大いに関連するものと考えられる。

#### 注

- (1) 森銑三著作集第九巻・鶴田恵吉『佐藤信淵』。両氏の見解はその評価はもちろんのこと微細な歴史考証に至るまで対立するが、ここでは後述するように「家学」についても信淵の「作為」と見做し、その事実から論をすすめておく。



- (2) 皆川淇園の開物を説いた著書には『易学開物』『易学階梯』がある。
- (3) 宋応星著『天工開物』三枝博音解説、三枝氏によれば、この書の支那での公刊は 1673 年（寛永 14 年）であり、我国での翻刻は明和 8 年（1771 年）であるという。信淵への影響もあったと思われるが、断定することは出来ない。ただし『経済要録』には「国家を領する者は、必ず経済の学を脩めて国土を経緯するの術を精密にし、天工開物の法を講明して政事を勉強せずんばあるべからず」と「天工開物」のコトバは見られる。
- (4) 『経済要略』（以後「要略」と記す）『経済要録』（以後「要録」と記す）の二著はいずれも『経済総録』六十卷（文政 5 年不伝）の要約である。前者は門人橋本治右衛門の要請によって、後者はやはり奥山操、加藤淳等の要請によって作成されている。そこで述べられている趣意にはほぼ相違はないが、『要録』の方が内容的に詳しく叙述されている。そこには後述するように、橋本生への反撥があったようである。なお、「佐藤信淵家学全集」全三巻には両者とも掲載されているが、「佐藤信淵家学大要」には『要略』だけが掲載されている。
- (5) 日本思想大系『徂徠学派』所収。
- (6) 信淵は宇田川玄随に接することによって、蘭学を通じてすでに西欧科学から元素論を学んでいた。『鎔造化育論』に於て、彼は西欧科学が自然界の森羅万象や、天地間の庶物を分析術によって解剖している事実について述べている。そして「西洋人窮物理尽巧妙。最精製煉術。」としてその科学性を羨望している。この点は三枝博音氏も注目しておられた。（『日本の知性と技術』）
- (7) かつて三枝博音氏が我国の科学技術史の研究に力を注がれたが、佐藤信淵についてもこの方面からの研究を一層必要としよう。何故なら、経済開物の思想も技術及びその組織化と大きく関連した総合的な学問だからである。
- (8) ここで教育所とは、今日の養育所と託児所を兼ねた幼稚園のようなものであろう。幼稚園の創設者フレーベルの構想（1840 年）に先だつこと 17 年前であるという。（鶴田）
- (9) 樹民とは「土地の宜しきを檢察して、種々の樹木を植うることを業と為す民なり、故に木民とも名く」。また礦民とは「金玉、土石等の物産を採出することを業と為すの民也」とある。

### (3)

これまでの所で明らかなように、信淵の経済開物は、一種の経世済民の学でもあった。『垂統秘録』あるいは『要略』における「垂統」編には、この経世済民の学を裏づける信淵の国家観・政治観が示唆的に述べられている。

そこでは「垂統は経済の最も難きものなること」としているが、その垂統とは「国家に君たる者子々孫々万世衰微すること無く、其の国家をして永久全盛ならしむるを云ふ。」とある。この法は上古以来の聖人も未だ極めておらず、創業（開物の業を創むるを云ふ）、開物の道を講じて国を富強隆盛する英主はあっても、それは僅かに一時の富盛であって、子々孫々まで久しく続くことがなかった。そこで信淵は「統を永久に垂るること」（垂統）を主張するのである。経世済民を謀り、国家の富盛を希う「国家に主たる者」は、この垂統の法に依らなければならない。その意味で、垂統は経済第一の要法でもあった。ここに経済開物の思想は、垂統の観念と結合することによって、国君のための経世済民の学として、必要・十分なものとなった。

経世済民の学としての経済開物は、子々孫々まで永続することによって国家を富盛させることであり、国家に主たる者は「天地に代りて天地の神意を行ふ」ことを役割とするのである。そして国君は天地の神意を奉行していくために、その機関として三台・六府を設けて国土の経営にあたれば、其の国の隆盛は天地とともに永続して、八百万世を経るとも衰微することがないとも云う。しかし、三台・六府を設けることは実際には容易なことではないために、その略法として教化台ともいうべき講談所の設置が説かれている。そこで道師による国人の教化を行なうのであるが、その内容は神儒仏の三道であった。しかし、信淵が垂統ということを強調していることから明らかなように、そこではあくまでも神道を中心とした三教一致が主張されている。「我家の門生を教育するに必ず三道校合の窮理学を以てす」としているが、それも四海・山相等々を経緯する限りにおいてである。神道者にしても儒者・仏者にしても、信淵にとっては「仁心篤く徳操ありて天神意・万物化育に明理徹底したる者を得れば、即ち垂統に従事すべし」として、いずれは天地の神意に基づいて子孫へ統を永続させることの必要性を説く。そこにはまた信淵が自らの学問を佐藤家五代の家学であるとす

る発想の根拠をもうかがえる。

このような思想的傾向は、幕末期に於て一般に見られるもので、信淵にあっては神儒仏の三道にさらに蘭学の影響もあったが、究極的にはやはり天地の神意を尊重する国学者とみなされる。それ故に信淵は、儒者と仏者の両者を批判している。即ち、儒者に対しては「仁義五常の道を明弁して人に彝倫<sup>イリン</sup>を教誨する業なれば、極て崇敬すべき者なれども兎に角に人を才<sup>とりたてる</sup>発に育成ことを好むの僻あり」とその欠点を指摘し、仏者には

仏者の主とする所は大抵仏祖・宗祖の功德を盛に讃歎して、天地の恩と国君の恩は頗る其の次なる者の如くに説き、国人に仏を帰依せしめて錢糧を寺院に募るが故に、国土を富饒し、人民を蕃衍し国家永久隆盛するの實用を為さざること多し。

と多少偏見を以て批判している。それがために、儒者も仏者も講談所の導師たる資格を与えるには疑問があるとしている。しかし、このような批判のうえにたって、次のようにも述べている。

必ず三道兼学して其精粹を簡拔し、国家の為に蒼生を教化して天地の恩と国君の恩とを頌讃し、万民をして涕泣感服の念を篤くし、日夜天恩と君恩を報謝せんことを欲し、境内心力一致して国事の経営を勉強せしむるを専要とする。

信淵は、天恩＝君恩を賞讃し、それに報謝することを基本とする神道に矛盾しない限りにおいて、儒教や仏教の教えに学ぶことを認めている。このような解釈は、信淵が自らの神道を強調せんがためのものであり、また彼自身も決して当時の正統を代表する神道家ではなく、異端の側にあったが故に、それらは儒仏の本質批判とはならず、むしろそれらを自らの手段として利用するための批判に止まるものであった。そして、天地の恩とはまさに国君の恩に他ならず、その意味では封建諸侯の理論的な代弁者たどるをえず、またそれを正当化させることにもなった。信淵は「凡そ天地の恩を謝するの要は天地の神意を知て敬て此を行ふに在り」ともいうし、

また儒者を批判するなかで、自らの学問が「高材英邁を欲せざるに非れども、先づ実行を本とする」などと言う時にも、それらは信淵の真意ではなく、むしろそこには諸侯に取り入ろうとする異端の国学者の作為に満ちた姿を見るのである。

経済開物の思想に見られた優れた啓蒙性も、ここでは実際には天恩＝君恩という形で結びついた諸侯の経世済民の学のうちに位置づけられてしまっている。

我道の神道を祖述する所以は、天地鎔造の功德を讃歎して此を謝するに善を行ひ、人を救ふの事を以てし、万物化育の神恩を欣戴して、此を報ずるに物を開き、世を豊にするの業を以てし、天地の神意を講明して、天地の神意を敬ひ行ふのみ

天地の神意を講明する経済開物は、一方で自然の経緯を正確に観察し認識するという方向をとりながら、他方では最も世俗的に君恩に結びつけられており、そのことは信淵自身が現実的に近代思想を準備するものであるよりは、むしろ封建諸侯を正当化し、その代弁者になることであった。信淵が経済開物を経世済民の学として構想するとき、それを垂統（統を永久に垂るること）という形で語っているのは明らかに万世一系の秩序体系を願う国学者の発想があったと見做しうるであろう。しかも、それは苦況のなかであって、封建的秩序を確保せんとする諸侯の欲求に結びつくものでもあった。そして、そのことは信淵が自らの学問を佐藤家五代の伝統に基づいた家学であるとして権威づけたことと無関係ではないのである。

先述したように、信淵の著書は彼が家学という形で伝えるものをも含めて、その量は膨大なものである。しかし、その家学については疑問が多く、ここでは森銑三氏の家学についての評価、即ち佐藤家の家学は「信淵一代に作られて、信淵一代に滅びたのである」という認識を出発点としたい。そしてそこに信淵が神道に基礎を置いた経済開物を説き、なお且それを佐藤家の家学として打出していこうする作為のあったことと、その根拠とす

(1)  
るところを次に見ていこう。

佐藤家の始祖は九郎判官源義経の四天王の一人であった左兵衛尉佐藤継信であるという。

信淵に依れば佐藤家学の始祖は三十三世にあたる信利(歿・元和7年～元禄15年)となっており、「我家ノ農政経済ノ学ハ此書ヲ以テ基原トスル所ナリ」といわれている『国土経緯論』2巻を著わしたと伝えられている。信利には他に『開物新書』『開国新論』等の著書もあったともいう。家学の二代目は信利の賀養子となった武行(元菴・寛永13年～正徳3年)で「四海ニ遊歴シテ諸国ノ形勢ヲ熟察シ、諸地北極出地ノ度分ト気候寒暖ノ強弱トヲ例シテ気候審驗録ヲ著シ……」とあり、信利と同様に観察・経験を重んじた学問をその特徴としていたようである。

信淵が佐藤家五代の家学について、明確な記述を行なってくるのは、家学三代目、信淵の祖父、信景(不昧軒・延宝2年～享保17年)からである。『譜略記』には、信景について「資性穎敏材力人ニ絶シ博ク群書ヲ読ミ殊ニ農業・物産ノ学ニ精シク土性弁ヲ著ハシテ六土四十八種ノ性功ヲ明弁シ作物豊熟ノ天理ヲ説究メテ化育ノ蘊泉ヲ開示セリ」と記されている。そして『要略』の序には「我が先祖は出羽雄勝郡に家し、世々医を以て業と為せり。祖父不昧軒に至て謂らく、『医技は事小なり、願くは国家衰耗し万民困窮するの大病を救はん』と。」とその志が記述されており、この頃に医学の道を離れ、経済や開物の学を修める経世家として家学の礎石が敷かれたようである。信淵も不昧軒に家学としての経済開物の基礎をおいて記述しているが、経済開物を鍛錬し、『益々其道を精究せんとする遺志は、先づ信淵の父、家学四代目信季(玄明窩・享保9年～天明4年)に受継れた。信季は遺命を継いで四十余年もの間諸国を遊歴して経済開物を講究し、『開物要録』『製錬要術』等の大著を著わしたと伝えられている。この信季も足尾の旅亭で次のような遺命を信淵に残したという。

我歿するの後汝もし故郷に帰らば、草木と同く徒に朽果ん者なり。庶

くは此より江戸に出で、勉強して物産・経済の学を講究し、父祖の宿志を継ぎ、以家学を成就せよ。

この時、信淵は16才であった。そして父の遺命を継で、信淵は当時蘭医として名声の高い宇田川槐園を訪ね、本草及び和蘭の諸説を学んでいる。<sup>(2)</sup>

ここでは詳細な考証を避けざるを得ないが、以上が信淵の伝える佐藤家四代の大略である。そして、父祖の著書と伝えられるものも殆んど信淵によって校訂増補され、ここに佐藤家五代の家学は集大成を見るのである。

経済開物もこれまで見たように、佐藤家学のひとつの理論的な支柱になっているが、その基底には先の三教一致説があり、またそれらは神道によって本質を規定されていた。

信淵は自らの家学についても「我家の学則は古今に貫通し、和漢・切度の道学を融会し、然して此を高皇産霊神の天地を鎔造し給ひたる神意に折衷したる者なり。」と述べており、それは神＝国君を頂点とした万世一系の皇国観に結びつくものであり、それはまた家父長的な「家」の観念そのものに他ならない。

このような思想的脈絡のうちにも家学の根拠を見出せるが、信淵が自らの学問を殊更に佐藤家五代の家学として強調した意図は何処にあったのであろうか。文化12年頃、江戸を離れた信淵は南総の<sup>まめざく</sup>大豆谷村に退居していたが、その時平田篤胤の皇国古道の学に接し、自らの神道もここに家学としての体裁を整えたようである。<sup>(3)</sup> 即ち、

深く天神地祇の遺説を精究するに、本正く末明かにして、天地の万物を化育するの理皆自ら渙然として解釈することを得て、以て家学を成するに至れり

そしてこの頃に、信淵は日夜ただ家学の窮理諸説を校合して、「鎔造化育論」「天柱詔」「経済総録」の草稿を子孫に遺す目的で完成していたという。このように信淵が自らの学問を家学というところには、その原理においても、またその形成過程においても、すべてを天地の神意＝皇祖産霊大神に

求める神道と思想的に密接な関連のあったことが理解されよう。

更に、信淵が殊更に家学の伝統を強調するうちには、長い遊歴生活を送り、そこで説いた学問も実際には当時であってかなりの斬新な啓蒙性をもっていたゆえに、かえって優遇されることなく、つねに異端の道を歩まねばならなかったことから来る虚勢のあったことを看過することは出来ない。信淵自身も武芸火術等の演義、兵学戦法等の講談には、その実学性ゆえに、多くの諸侯、士大夫が興味を示してくれることもあったが、家学の本質である経済開物には誰れも注目してくれる者がなく、冷遇されていたことを嘆息している。<sup>(4)</sup>

国家を経済するの大道術に至ては、誰人も皆聞くことを甘んぜざる所なり、故に予が家祖父翁の此学を唱始めしより、此道を精究すること三世、既に百二十余年に及べり、然れども未曾て此学の事に由て、諸侯及び卿大夫の一人も訪来りしもの有るを聞かず

長い遊歴生活にあって、信淵は津山藩の弊政改革を初め、秋田藩の財政改革にも携わっており、その他多くの諸侯・士大夫にも接触しているが、そこでの待遇は決して良いものではなかったようである。<sup>(5)</sup>そこには様々な理由はあるが、基本的には封建的秩序としての門閥制度がなお根強く社会を支配しており、その閉鎖的・自己完結的な停滞性は信淵のように遊歴生活のうちに培った実験や観察を重視する学問を受入れる程には寛容でなかったようである。我国の封建性を特徴づけるもののひとつに「家」の觀念があり、それは当時の学問の世界においても門閥制度として貫徹していたのである。そこに見られる擬制的な親子関係は、その本質において明らかに封建的な主従関係を意味し、また上からの支配の体系でもあった。そこでは主君に対する忠誠を義務とする代りに、主君によってさまざまな特権が与えられ、その庇護のもとに安住することができた。そして特権を与えられた家は、正統を代表するものとして、その家業を子孫に受継がせる義務があり、それは世襲制として一層強固なものとして確立していったのである。<sup>(6)</sup>

信淵が「統を永久に垂る」として「垂統」ということを重視したのも、このような封建的な秩序の下における当然の帰結といえようが、彼が自らの学問を佐藤家五代の家学として強烈に押出してくる背景には、明らかに統から疎外されていた異端の側からの正統派を志向する作為があったといえよう。

信淵に『経済総録』の要約本『要略』を願った門人橋本治右衛門が、経済開物の講義を二、三ヶ月聞いただけで、江戸に出て自ら経済の学を唱え、それが思いがけず多くの諸侯・士大夫に尊敬され、国事の会議にも参加していることを知った信淵は、怒を殺しながら「彼（橋本）が油黷利口を以て或は邦家を欺き、我家学を汚穢すること有らんことを恐る」という所には、彼もまた強く封鎖的な「家」の意識をもっていたことを示していよう。

観察や経験を重じる経済開物は、その意味するところからも必然的に実践的でなければならなかった。そのためには当時の社会にあっては何らかの権威を必要としたであろうし、世襲としての伝統をも必要としたであろう。即ち、封建的な門閥制度の支配する社会にあっては、正統派であることが最も実践的たりえ、また最も現実的であったのである。ここに佐藤家五代の「家学」は信淵によって、経世済民の学として諸侯に受入れられるように作為されたのである。そして、それはまた逆に優れて啓蒙性を備えていた経済開物の思想的な発展をつみとることになり、近代思想への萌芽を見ないままに停滞させてしまったのである。そして、世襲制を旨とする家学は、その知識や方法をいわば先祖伝来の家産として確保し、つねに閉鎖的で自己完結的なものとしてもち、所謂一子口伝の秘伝主義の立場をとることになる。それは明らかに蒙昧からの解放を意図する啓蒙性とは全く相対立するものといえよう。先に見た信淵の橋本生に対する姿勢にもその傾向をうかがえるが、彼の鉱山開物の書とも言うべき『抗場法律』の序には次のように記されている。

抑此抗場の法律は、我が家にて一子相伝に口授することにして、始よ



り書に著すべき事に非ず．……（中略）……此律は極めて大切にすべき秘事なるを以て一子に口授するの外は絶て他人に伝へざることなり．

自然＝物質の客観的な認識から発足し、その内容においても極めて啓蒙的な色彩を備えていた経済開物の思想も、その本質においては神道によって規定され、またそれは封建的な「家」の観念に結びつき、自らその発展性を阻害し限界づけることになった．佐藤信淵の経済開物の思想は、その意味で我国に自生した啓蒙的思想として、この時期の最も特徴的なものといえることができる．しかし、このような傾向は、信淵に限ったものではなく、江戸中期以降、漸進的に展開する土地経済から商品経済への移行過程に見られた幕末の一般的な思想状況でもあった．幕府によって公認された朱子学を中心とする儒教的な倫理は、あくまでもこの時期の正統を代表するものとして、武士層はもちろんのこと、民衆の中にも深く滲透していた．たとえ洋学が次第に隆盛してきたとしても、また国学が多くの農民層に支持されてきたとしても、儒教倫理の支配と強制はそれを上回るものがあったといえる．しかし、幕末に至って、封建的な土地経済が次第に弛緩してくるに従って、儒教倫理に基づいた政治的な支配と強制もまた弛緩せざるをえず、また他方、洋学は「蛮社の獄」（天保10年）に象徴されるようにその発展の芽はつみとられ、あるいは蕃書調所等の機関の下に幕府よによって管理・統制されることになった．そこにいわば第三の道として神道が在地の豪農・中農層の教学として支持されてくるのである．平田国学を中心とする幕末の国学運動は、結果的に神道の呪縛を脱しえなかったが、一方では経験的かつ現実的な具体性をもった生産技術や生活の指針を提示したことに大きな意味があった．農業生産の現場にあって、その中核をなす在地の豪農・中農層においては、生産の増長こそが最大の関心事であり、国学者の説く生活理論は少なからずその要請に応えるものであった．その多くは最下層の農民たちに対して、いわゆる共同体的規制に絡んだ「家」観念の尊

奉を暗黙のうちに強制し、又そのことが富国隆盛に結びつくことだとも説かれていたのである。

所謂、幕末の「草莽の国学者」たちの思想は、一面ではいわば我国の形成期ブルジョアジーに対応するものをもちながら、それを展開するまでに至っていない。それは神道が基底にある限り当然の帰結と言わざるをえないが、しかし、それと絡んだ「家」の観念が、思想に限らず、生産の場面においても封建的な秩序体系として支配的であったことも看過しえないであろう。信淵はその「家」の観念を最も作為的に利用して、自らの経済開物の正統性を主張したわけであるが、それは決して封建社会の全体的な秩序体系のなかで意識化されていなかったがために、近代思想への橋渡しとしての役割を十分に果すべき啓蒙性にまで昇華されなかったといえよう。

この小論では、前半で信淵の経済開物の思想が、当時において、自然の観察・実験を重視した優れて啓蒙性に富んだ内容をもつものであることを指摘した。しかし、結果的には神道と結びついた「家」の観念によって、それ自体、その限界を内在させており、近代への発展を自ら阻害してしまった。その「家」の観念は、我国の近代化の在り方を解くひとつの鍵であることは言うまでもない。それはあらゆる生活の場面で、所謂共同体的意識と絡んで擬制的かつ恭順的なものとしてあったのである。ここで不十分ながら、概観してきた信淵の作為による家学もその矛盾を示すひとつの好例といえよう。

神道と「家」の観念への頑なまでの執着は、優れて啓蒙性に富んだ開物思想を近代思想へと成長させえなかった。それはこの期の他の多くの優れた思想が近代思想との連続面でとらええないことと同様であり、その意味では、ただ信淵の経済開物に限ったことではなく、むしろ我国の近代化の様態そのものに根ざすもの、いわばその構造的特質といえるものかもしれない。その点を基軸に今後の研究をさらに進めてみたい。

## 開物思想の啓蒙性について

- (1) 野村兼太郎『江戸時代の経世家』所収「佐藤信淵」に於て、十分な展開はされていないが、江戸時代は「家族は家業あつての家族であつて、家族あつての家業ではない」とされて、佐藤家五代の家学もそういう中に位置づけられている。
- (2) 宇田川玄随とも云うが、津山侯に仕す蘭医で、当時幕府侍医の桂川甫周とともに有名であった。正統派の蘭医としていわば「家学」を成し、そのことは信淵の家学の発想にも多分に影響したと思われるが、信淵の蘭学理解の方は疑わしく、途中で放棄し神道に大きく傾斜していく。
- (3) 渡辺刀水「佐藤信淵と平田篤胤」（歴史公論 3 の 9）に依れば、篤胤の伊吹舎門人録の文化 12 年の条に「出羽、佐藤百祐<sup>ソフヒコ</sup>信淵 後松庵」と記されているという。この年信淵は江戸にあって幕府神道方吉川従方の門人となっており、その学頭を命じられた年でもある。両者の影響を受けたことは信淵の著書にもうかがえるが、両者は幕府の神道方あるいは本居家の支流として神道の正統を代表するものであったことは、信淵の「家学」に何らかの影響を与えたであろうと推理できる。
- (4) 大豆谷村への退居の理由も、防海術の便要なる諸法を知った諸藩の士大夫が「日々予が家に輻輳して、門前の車馬群を為せり、予が妻なる者、予が浪人にして此の如く虚誉甚高きを以て、不測の災難あらんことを畏れ、頻りに隠道を勧めしが故なり」（要録序）と誇大な表現を使っているが、実際には吉川家の神道講談所取建の問題に絡んで江戸払を言渡された時でもあった。
- (5) 津山藩の侍医・宇田川玄随の塾生であった信淵は、少老三原金太夫に認められ天明 6 年（1786 年）藩の政治改革を議した金百両を賜ったという。秋田藩の財政改革は文化 7 年（1810 年）のことである。この改革は失敗し憂心のもと江戸に帰った。
- (6) 家学の伝統は、古代末期から中世に成立したものと思われる。特に朝廷につかえた諸道博士（例えば、文章道の菅原・大江など）が一定の家によって世襲されたものである。江戸時代に於ては芸道・武道等々の領域にも盛んになり、その正統な家は特権を与えられ、その極意も一子口伝の秘伝主義であった。芸道に於ける家元制度とともに、諸道に見られる家意識は今後更に研究を必要としよう。なお家元制に関しては、西山松之助『家元の研究』及び川島武宜「家元制度」（『イデオロギーとしての家族制度』所収）を参照されたい。
- (7) 森銑三氏は信淵の家学についてその著書の出版と関連させて次のようにも述べておられる。「信淵としましては、そのいはゆる家学は諸家へ取入る方策

として唱道していましたので、その生前に自ら著書を刊行することなどして  
いませんが、その著書は信淵にとっては、寧ろ刊行してはならないものだっ  
たのであります。随ってまた門人を養ふといふことなども、信淵の本旨では  
なかったわけで、信淵の家学が信淵一代に成り、一代に亡んだのは当然の帰  
結であつたらうと思はれます」。

## On the Enlightenment in the “Kaibutsu” Ideas

— Case of the “Kagaku” of Nobuhiro Sato —

*Yukio Tozawa*

### Résumé

I think that enlightenment is an idea of a transition period from Feudalism to Modern. It may be the idea as a presupposition of Modern. When I give an instance in Japan, it is the “Kaibutsu” ideas. In this essay, I show the “Kaibutsu” of Nobuhiro Sato in the age of Edo, which is relative to economics. He was a political economist, politician, scientist, strategist and a Shintoist (Kokugakusha), in a sense, a Japanese encyclopedist in this age. Its ideas make much of observation and recognition of Nature, so that become to be very scientific and reasonable. But on the other hand, it is relative to “Shintoism” and the consciousness of Japanese household, in its fundamental principle. Then, its enlightenment do not develop to make progress to Modern Ideas. So in this essay, I intend to show its enlightenment and its limit of “Kaibutsu” ideas, as compared with Modern Ideas.